

## concept

### 問題 1

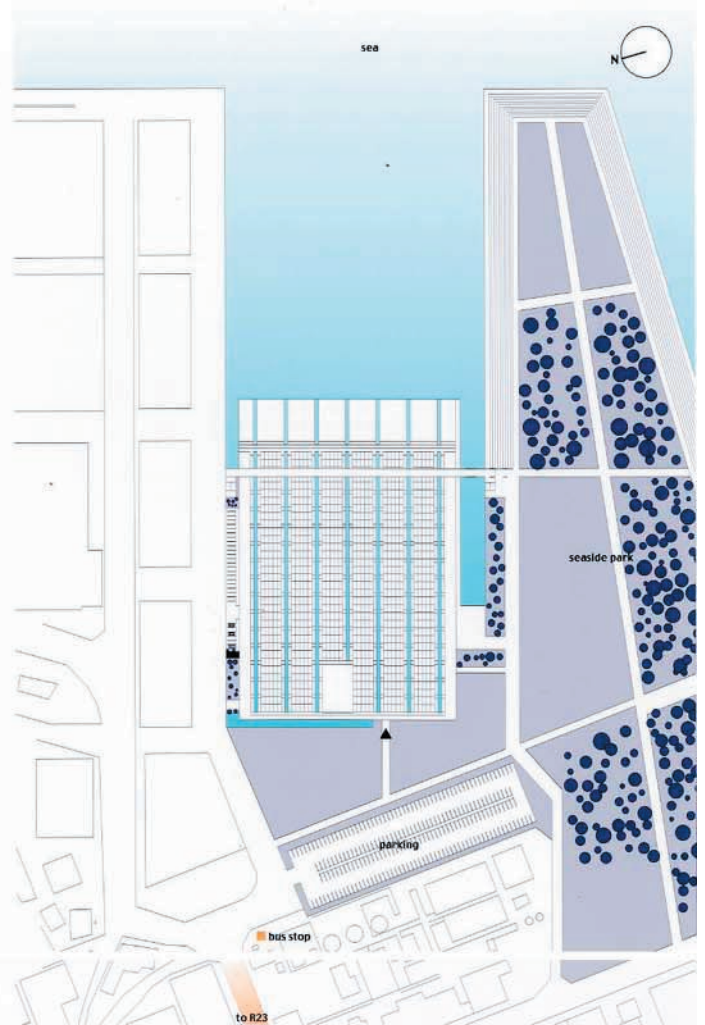
三重県四日市市は石油化学産業を主産業とし、四日市港は原料や製品の輸出入の場として産業基礎を形成している。四日市港の千歳地区は、幕末から明治にかけて伊勢湾内最大の商業港として栄え、明治中期には福葉三右衛門という人物によって修築され、貿易港と栄えた地である。しかし、コンテナ船の巨大化と輸送の効率化に伴い、コンテナターミナルが霞ヶ浦地区に作られた。これにより四日市港の荷揚げは、ほとんどが霞ヶ浦地区で行われるようになり、千歳地区は貿易港としての役目を終えつつあり大きな転換期を迎えている。

### 問題 2

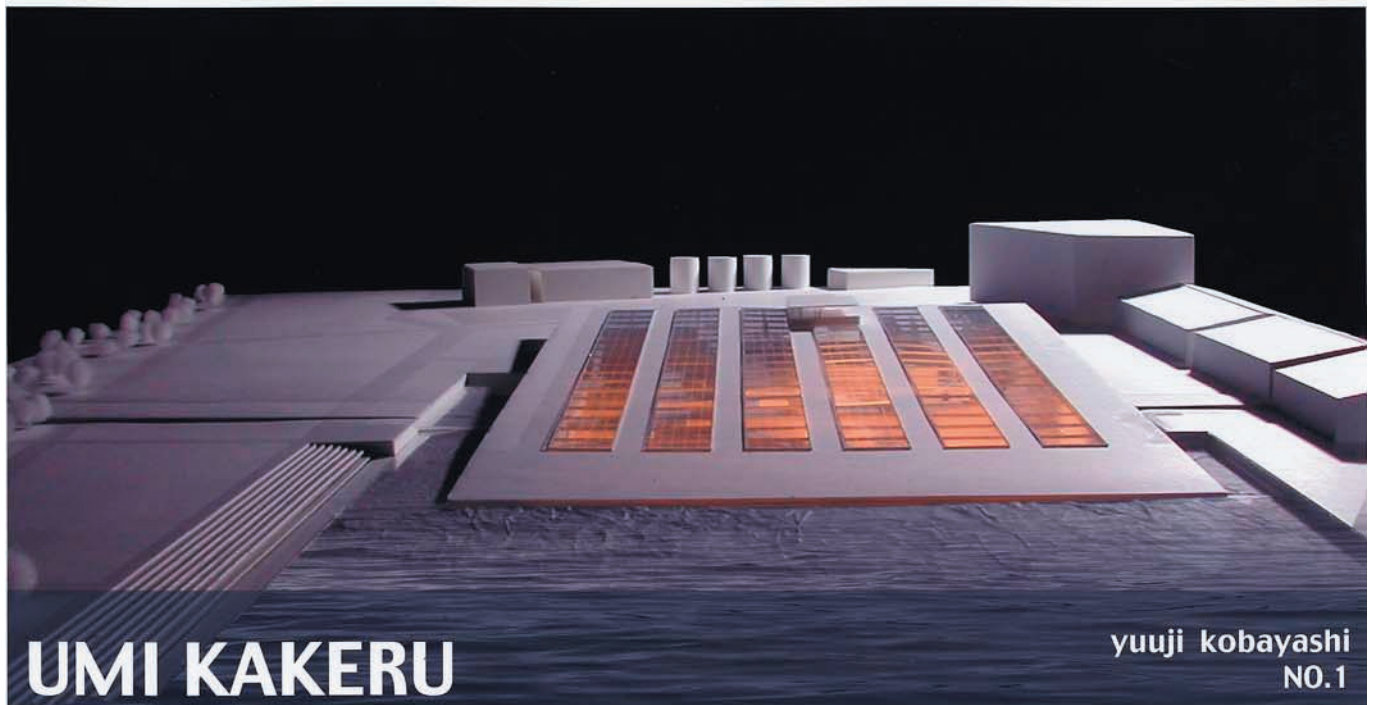
四日市市の、主要産業は石油化学産業である。石油化学産業は、その原料を海外からの石油に頼っているため工場は臨海部に集中し臨海工業地帯を形成している。そのため四日市市は、臨海都市であるにも関わらず、人々の活動は内陸地に限定されてしまっている。

### 提案

フィールドを提案する。  
そこでは、人々が、文化が、技術が、海と関わり、橋をカケタようにお互いが密接に結びつき、海は新しい都市のフィールドとして取り込まれる。海は、都市に組み込まれることで新しい価値をもたらし、それぞれに活力ある活きた(カケタ)ものへとになっていく。



site plan 1: 1000



UMI KAKERU

yuuji kobayashi  
NO.1

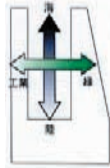


敷地を南側から見る

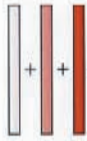


敷地を南側から見る

■展示空間配置のプロセス



計画地を縦横軸におくと、y軸においてそれぞれ対立する要素を抽出することができる。



特性の違う展示分野を、x軸方向の工業→緑のグラデーションの変化によって配列することで敷地と周辺の雰囲気が同化する。



y軸の海→陸では、四日市の産業からウツノ島という時系列の流れが読み取ることができる。時系列の流れは展示計画においての基本軸となる。



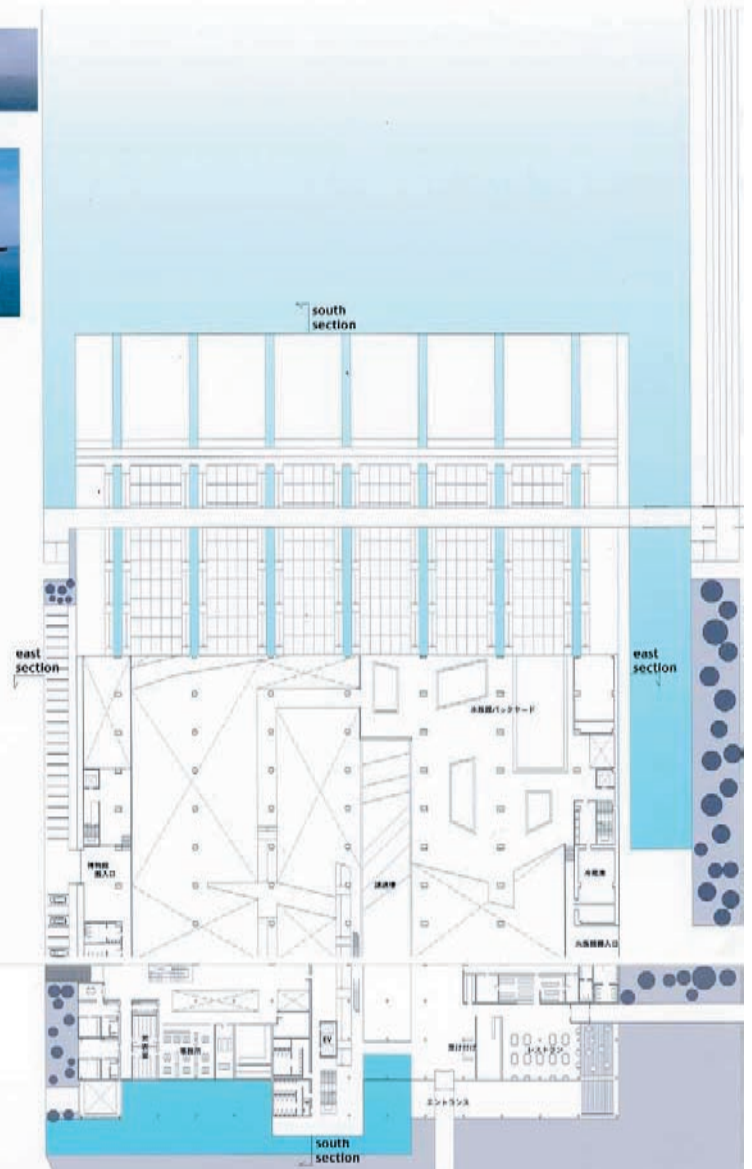
時系列において同時期もしくは前後近い要素で展示分野を絡んでいく。展示分野と時系列で区切られた部分は、それぞれ分野、時代の個性を有した展示空間となり、加えて限りの展示空間とも連動した物となる。ここでは、来館者は自由に観覧を選択できるがその展示構成は流れを保持したものである。



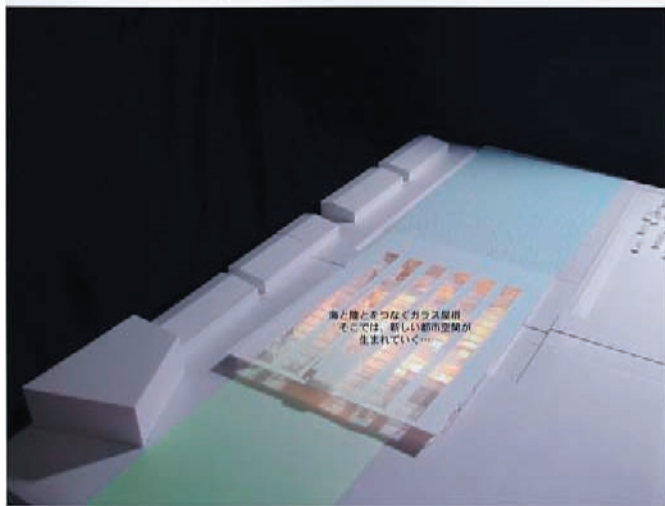
展示分野を時系列によって配置することで歴史的文脈が生まれる。



来館者は展示空間を移動する中で、どのような移動をしてもいい。または分野の流れの中で展示を見ていくことができる。



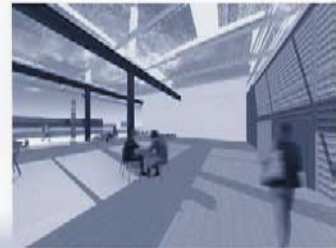
1F plan 1:400



海と陸とをつなぐガラス屋根  
そこでは、新しい都市空間が  
生まれていく……

■施設概要

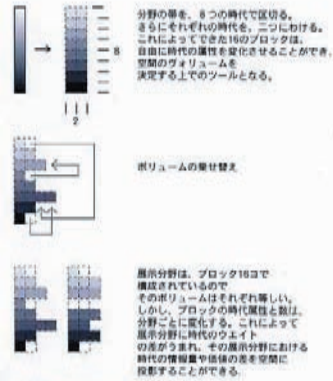
敷地は、四日市湾平蔵地区の第一埠頭と第二埠頭の併である。施設内容は主に四日市地区を中心とした工業廃止跡地の文化や産業、海のかかわりについての展示を行う博物館と、海の生物とのふれあいをうみ海産物館で構成されている。建物は、買置港ならではの深い水深を利用して地下部分に展示空間をとっている。これにより東側壁は、海へ浸っていくような空間体験をする。また、展示空間には特定の階層はない。しかし、訪れた人はなんらかの流れによって展示空間を巡回できるようにした。ガラスの壁根は、輝やかに結晶し海と同化する。これによって建物は、その領域を曖昧にし、海と陸をグラデーションをかけたように一体化していく。



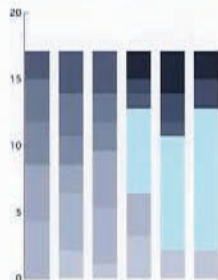
この建物は、海と陸を大層根でカケルだけでなく、人々に海の貴さを教える建物自体が環境に配慮した機能を持つことで、海を生きた（カケタ）ものにする。また、博物館、水産館併設は四日市湾に、文化的価値を生み出し、新しい都市空間として湧いていく……



■展示空間のヴォリュームの決定プロセス

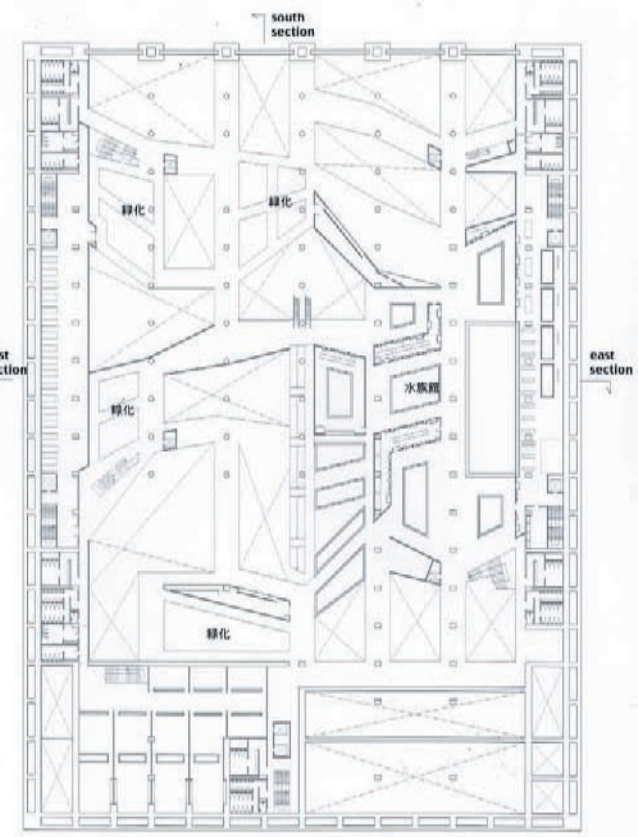
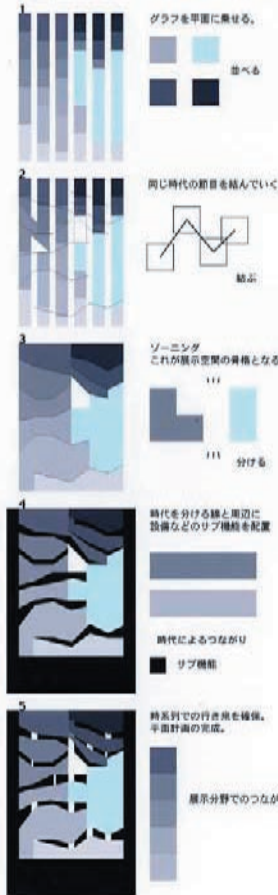


■時代区分とグラフ

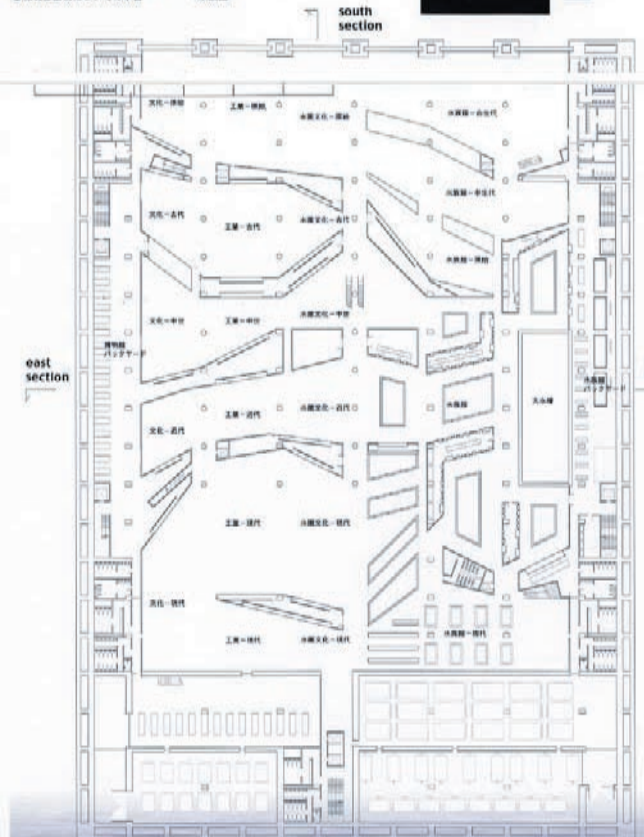


■展示分野の配置

- 展示分野は大きく分けて4種類に分類される。
- 臨海地域の生活や文化の展示 “文化”
- 近海地域の産業や技術の展示 “産業”
- 周辺地区のウミとの関わりでの展示 “水圏文化”
- 環境と生物についての学習 “水産館”

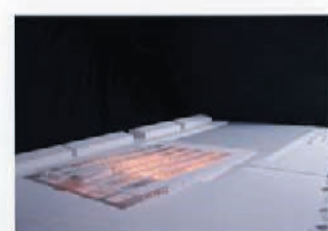


B1 plan 1:400



B2 plan 1:400

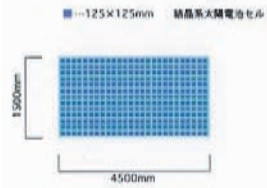
- 6 立体に起こす
- 7 面積の大きさにあわせてボリュームを決定
- 8 できた高さの差に緑化をほどこし階の差を水中の空間にあてはめ陸と海に掛け橋をわたす。
- 9 機能アタソメ図



UMI KAKERU

yuuji kobayashi  
NO.3

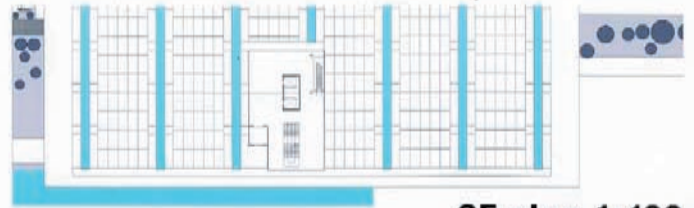
■detail 1:50



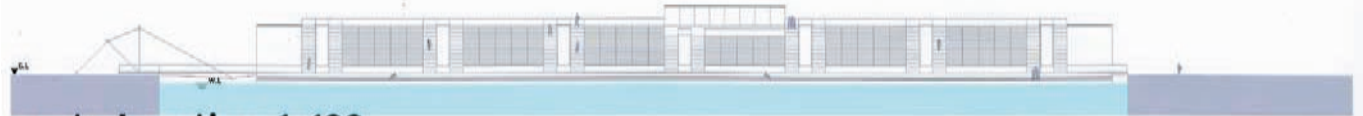
■solar panel

建築物の屋根のガラスには、透過性のソーラーパネルが使われている。透過率は43%で室内には落ち着いた光で包まれる。生産された電力は、中に海水を送るポンプに使われ、きれいになった海水は水産物の水増しにも供給される。

屋根全体のパネル総数 2483枚  
最大出力 2483×250w=620.75 kw



2F plan 1:400



east elevation 1:400



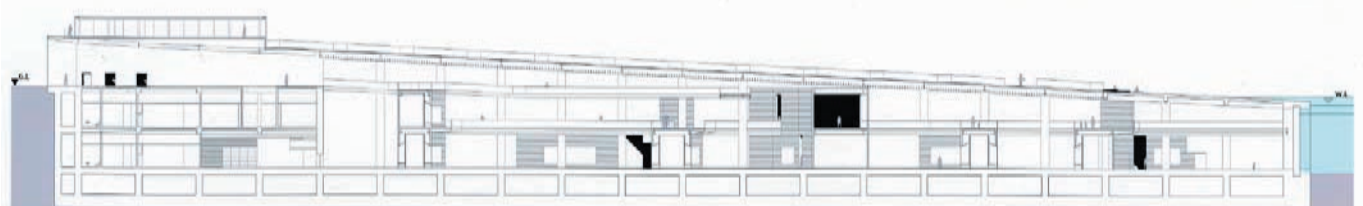
west elevation 1:400



east section 1:400



south elevation 1:400



south section 1:400

